

大学生の恋愛観と愛着スタイルの関連

——恋人に対する依存のしやすさと一般他者を想定した愛着スタイル——

田 沢 晶 子

Relationship between University Students' Views on Love and Their Attachment Styles: Tendency to Persistence in Romantic Partner and Attachment Styles that were created by imagining General Others

TAZAWA Shoko

Abstract : The relationship between tendency to persist a romantic partner and attachment styles created by imagining general others was discussed. The subjects were 116 university students (33 males, 82 females and 1 unknown gender ; average age : 19.43, SD=1.33). As a result of analyzing the collected data with the factor analysis created by Kataoka and Sonoda (2008), two factors of “relational anxiety” and “romantic partner-centric” were found. Differences in the persistence of romantic love among the four attachment styles, classified by the scale of attachment style created by imagining “general others,” was analyzed, and as a result, “preoccupied type” and “fearful type” had the persistence of romantic love, and both of them commonly had a negative self-view. “Dismissing type” was lowest in the degree of persistence among the four groups. This result showed a relationship between the individual differences of attachment styles to general others, not-imagined specific others, and persistence of romantic love. It was considered that the two types of negative self-view among the attachment styles to general others would possibly direct the persistence of “relational anxiety” and that of “romantic partner-centric” in an intimate relationship as love between the two.

Key Words : attachment styles, persistence of romantic love, general others

問 題 と 目 的

成人、青年期の恋愛を愛着プロセスという観点で捉え、情動制御、恋愛へのイメージ、恋人への依存傾向、夫婦関係の在り方と愛着スタイルの関連などを検証する多くの研究が行われている（坂上・菅沼, 2001, 金政・大坊, 2003, 片岡・園田, 2008, 尾形・船橋, 2016）。

Hazan & Shaver (1987) によれば、青年期は、愛着対象が母親から恋人へと移行する時期であり、恋人が情緒的に頼ることができる存在として機能する「安全基地を獲得する過程」と考えられる。一方、青年期の恋愛は、大野 (1993) が ‘アイデンティティのための恋愛’ と指摘するように、相手に呑み込まれる不安を感じたり、相手の挙動に目が離せなくなる等不安定な関係となりやすく、結果として交際が長続きしないという特徴も有する。田沢 (2011) では、大学生の恋愛依存傾向と失恋経験の関連の調べたところ、恋愛依存傾向が強いほど、失恋相手への関与度が強く受けるショックが大きいこと、相手との強い一体感を求めていることが明らかになった。恋

人に対する依存度の高い人は、失恋後も相手と連絡を取ろうとするなど失恋コーピングの「未練」の使用頻度が高く、関係崩壊後には安全基地を失ったような大きな喪失感を感じているのではないかと推測された。

愛着スタイルの個人差を測定する多項目式の尺度では“親密な対人関係体験尺度”(the Experiences in Close Relationships inventory: 以下 ECR) が信頼性、妥当性が確認され、基準的尺度として用いられており、その日本語版を中尾・加藤(2004)が作成している。これは恋愛関係における愛着スタイルの2次元「見捨てられ不安(Anxiety)」, 「親密性の回避(Avoidance)」を測定し4分類(安定型, 拒絶型, とらわれ型, 恐れ型)するものである(Bartholomew & Horowitz, 1991)。愛着対象として恋人のほかにも親友や家族が想定される(中尾・加藤, 2004)。

成人愛着理論では、幼少期の愛着対象にまつわる経験が思春期までに組織化され内的作業モデル(Internal Working Models: IWM)となり、その後の親密な関係において機能すると考えられ(Bowlby, 1973), これを明らかにする実証的研究が行われてきた(Hazen & Shaver, 1987, 金政, 2003, Steven & Jeffrey, 2004)。片岡・園田(2008)は、意識的側面に焦点を当て行動面を測定する恋愛依存尺度を開発し、調査を行った結果、恋人への依存のしやすさと恋愛対象における愛着スタイルに関連があることを示した。すなわち、恋愛関係において不安を抱きやすく、生活全般が恋人中心になりやすい恋愛依存傾向は、「とらわれ型」(親密性の回避が低く、見捨てられ不安が高いタイプ)と関連があると指摘している。

ところで、愛着スタイルの個人差は、親密な関係性を持つ対象を想定した尺度のみならず、一般的な他者を想定した尺度でも認められる(中尾・加藤, 2004)。中尾・加藤(2004)は、“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度(the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version: ECR-GO)の日本語版を作成し、信頼性、妥当性を検証した。他者として想起されたのは友人、恋人、家族などであり、愛着スタイル群の度数分布割合はほぼ同じであった。これより、一般他者について愛着スタイル尺度に回答を求めたとき、具体的な対象ではなく、何らかの“一般他者”を想定しながら回答していることを明らかにしている。片岡・園田(2008)では、恋愛における愛着スタイルの個人差が、恋愛依存と関連を示したが、対人関係一般において、見捨てられ不安が高く、親密性の回避が低い「とらわれ型」は、恋人や片思いの相手という特定の対象との二者関係で、より見捨てられる不安を回避するために対象にしがみつく傾向を強めるのではないかと推測される。

以上より本研究では、青年期の“一般他者”における愛着スタイルの違いと恋愛依存傾向との関連を調査し、愛着スタイルの個人差が恋人への依存のしやすさと関連するかを検証した。青年期の恋愛を愛着スタイルの視点より理解し、恋人への過度の依存や、失恋時の心理的ショックを予測することは、心理面接等の臨床場面で効果的なサポートを提供することにつながるであろう。

方 法

手続き・調査対象者

2016年8月から11月。近畿圏の4年生大学の学生に講義終了後、質問紙を配布し、「大学生の恋愛観」に関する研究の一環として、調査への参加を依頼した。自宅にて回答し、1週間後の講義時に回収すること、調査への参加は任意であり、答えたくない質問には回答しなくて良いこと、授業評価には無関係であること、また調査への参加・不参加に関係なく本調査に関連する過去の研究からフィードバックを行うことを教示した。有効回答数は116名であった。

調査票：以下の尺度を用いた。

- ① 成人、青年期の愛着スタイルを見捨てられ不安、親密性の回避の2次元より測定し4分類する ECR の一般他者版, ECR-GO (the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version, 中尾・加藤, 2004)。30項目。7件法。
- ② 恋人への依存のしやすさを測定する片岡・園田(2008)が作成した恋愛依存尺度。20項目。6件法。

結 果

1. 恋愛依存尺度, ECR-GO の因子分析

恋愛依存尺度の20項目について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化と解釈可能性から2因子解が適当であると判断した(表1)。2因子による累積説明率は49.03%であった。

表1 恋愛依存尺度の因子分析結果(N=116) 項目番号は片岡・園田(2008)と同じ

項目	恋愛不安	恋人中心
F1 '恋愛不安', $\alpha = .909$		
22 恋人からの愛情が、ほんのわずかでも欠けていると感じた時には悩み苦しむ	.887	-.104
05 自分が思っているほど恋人が自分のことを想ってくれないのではと不安になる	.822	-.105
14 電話やメールの返事が来ないと自分のことをそんなに好きではないのではと不安になる	.805	-.124
03 恋人が誰か他の人にも関心があるのではないかと疑うと、落ち着いてられない	.795	.054
18 親しい同性の友人が、自分の恋人と仲良さそうに話しているのを見た時に不安になる	.724	-.072
12 恋人とケンカや何か問題が生じた時、他のことは全く手につかなくなる	.668	.088
02 恋人が自分を気にかけてくれない時、すっかり気がめいってしまう	.656	.194
23 恋人のことを思うと、強い感情が突き上げてきてどうしようもなくなる	.604	.226
06 服装や髪型など恋人に合わせる	.393	.135
15 1日に1回は用もないけどメールや電話をしてほしい	.350	.283
	因子間相関	
		.706
F2 '恋人中心', $\alpha = .882$		
17 恋人中心の生活である	-.141	.816
08 急に恋人から会おうと言われたら予定が入っていてもドタキャンして会ってしまう	-.153	.755
09 恋人の予定に合わせて自分の予定を立てている	-.042	.739
13 恋人に尽くすことが好きである	.080	.670
24 恋人ともし別れたら、生きていけないと思う	.000	.614
20 ちょっとしか会える時間がなくても、そのちょっとのためであったら無理をしてしまう	.151	.598
04 恋人と別れないためなら、恋人のどんな嫌な要求にも従ってしまう	.157	.501
21 日常生活の中で、恋人といない時でも、恋人のことをよく考える	.364	.493
25 恋人がいないと人生は物足りないと思う	.253	.417
16 2人の関係について主導権は恋人が握っている	.247	.282
	因子間相関	
		.706

第1因子の代表項目は、「恋人からの愛情が、ほんのわずかでも欠けていると感じた時には悩み苦しむ」、「自分が思っているほど恋人が自分のことを想ってくれないのではと不安になる」、「電話やメールの返事が来ないと自分のことをそんなに好きではないのではと不安になる」であった。これらの項目は、恋人との関係性に不安を抱いていることを示すので「恋愛不安」とした。第2因子の代表項目は、「恋人中心の生活である」、「急に恋人から会おうと言われたら予定が入っていてもドタキャンして会ってしまう」、「恋人の予定に合わせて自分の予定を立てている」であった。これらの項目は、恋人に自分を合わせようとする内容であったので「恋人中心」とした。この2因子の項目は片岡・園田(2008)とほぼ一致した。

ECR-GOは、愛着の2次元「見捨てられ不安 Anxiety」と「親密性の回避 Avoidance」より構成される(中尾・加藤, 2004)。「見捨てられ不安」は、自分は他者から愛情や注意を受けるに値する/値しない、という自己観が positive, negative に2分割される。「親密性の回避」は、他者は助けてくれるし関心を持ってくれる/他者は信頼できないか拒否的である、という他者観が positive, negative に2分割される。ECR-GOは、多くの先行研究より信頼性、妥当性が認められている。本研究において確認のため因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った(表2)。累積寄与率は37.04%であった。

第1因子では「14. 私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する」、「2. 私は見捨てられるのではないかと心配だ」、「8. 私は知り合いを失うのではないかとけっこう心配している」などの負荷が高く「見捨てられ不安」であった。第2因子では「9. 私は人に心を開くのに抵抗を感じる(逆転項目)」、「15. 私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない」、「23. 私は人とあまり親密になることがどちらかというと好き

表 2 ECR-GO の因子分析結果 (N = 116) 項目番号は中尾・加藤 (2004) と同じ

項目	見捨てられ不安	親密性
F 1 '見捨てられ不安', $\alpha = .905$		
14 私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する	.810	.044
02 私は、見捨てられるのではないかと心配だ	.795	-.152
08 私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している	.767	-.168
06 私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する	.754	-.180
22 私は、(知り合いに) 見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない*	-.704	.074
04 私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している	.684	-.239
18 私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言う必要がある	.615	.052
24 私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかつたら、私はきつと気が動転して、悲しくなったり腹が立ったりする	.603	.034
30 私は、私がいてほしいと望むくらいに人がそばにいてくれないと、イライラしてしまう	.549	.130
28 私は誰かとつき合っていないと、なんとなく不安で不安定な気持ちになる	.543	.101
32 私は、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする	.525	.186
10 私はいつも、人が私に対していてくれる気持ちが、私が人に対していてほしいという気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う	.513	.130
34 人にダメだなあと言われると、本当にダメだなあと感じる	.498	-.178
16 私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私から離れて行ってしまふ	.440	.122
20 私は、人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしているのを感じることもときどきある	.420	.167
12 私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人がうんざりして私から離れて行ってしまふ	.415	.134
36 私は、知り合いが私のことをほっといて自分一人でも何かすることが重なってくると腹が立ってきてしまふ	.412	.285
	因子間相関	.162
F 2 '親密性', $\alpha = .855$		
09 私は人に心を開くのに抵抗を感じる*	.143	-.746
15 私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない	.006	.687
23 私は人とあまり親密になることがどちらかというと好きではない*	-.171	-.664
17 私は人とあまり親密にならないようにしている*	-.036	-.621
01 心の底で何を感じているかを人にみせるのはどちらかというと好きではない*	.163	-.593
27 私はたいてい、人と自分の問題や心配事を話し合う	.132	.576
03 私は、人と親密になることがとてもこちよ	.239	.523
25 私は、人に何でも話す	.283	.514
29 私は人に頼ることに抵抗がない	-.045	.497
21 私は、自分が人に依存することをゆるすことがなかなかできないと思う*	.128	-.482
19 私は比較的容易に人と親密になれると思う	.010	.456
31 私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない	.025	.449
26 私は親密になりたいと望むほどには、人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う*	.307	-.349
	因子間相関	.162

*は逆転項目

ではない(逆転項目)」などの項目に負荷が高く「親密性」とした。なお、恋愛依存尺度、ECR-GO の 2 因子について性差は認められなかった。

2. 恋愛依存傾向と愛着スタイルの関連

次に、恋人への依存しやすさと愛着スタイルとの関連を検討した。ECR-GO の 2 次元「見捨てられ不安」, 「親密性」と、恋愛依存尺度の 2 因子「恋愛不安」「恋人中心」の得点との相関係数を算出した(表 3-1, 3-2)。

その結果、ECR-GO「見捨てられ不安」は、恋愛依存尺度 2 因子「恋愛不安」, 「恋人中心」得点との間に正の相関がみられた。ECR-GO「親密性」は、恋愛依存尺度 2 因子「恋愛不安」, 「恋人中心」得点との間に正の相関がみられた。

表 3-1 ECG-GO, 恋愛依存尺度, 各因子の平均値と標準偏差 (N=106)

	平均	標準偏差
恋愛不安	32.387	11.707
恋人中心	28.349	10.017
見捨てられ不安	59.642	18.196
親密性	51.613	12.771

表 3-2 ECR-GO と恋愛不安尺度との相関係数

	見捨てられ不安	親密性
恋愛不安	.695**	.330**
恋人中心	.593**	.341**

**p<.01 を示す

表 4-1 恋愛不安得点 Hi/Lo の自己観, 他者観得点平均値, SD および t 検定の結果

	恋愛不安				t 値
	Hi (n=24)		Lo (n=16)		
	M	SD	M	SD	
自己観 (見捨てられ不安)	40.292	9.341	25.250	9.103	5.039**
他者観 (親密性)	35.500	8.617	23.688	9.604	4.058**

**p<.01

表 4-2 恋人中心得点 Hi/Lo の自己観, 他者観得点平均値, SD および t 検定の結果

	恋人中心				t 値
	Hi (n=24)		Lo (n=16)		
	M	SD	M	SD	
自己観 (見捨てられ不安)	37.500	11.558	31.625	12.334	1.504
他者観 (親密性)	33.227	9.754	27.500	11.165	1.682

次に, 恋愛依存尺度 2 因子「恋愛不安」, 「恋人中心」の得点を, 上位 25%, 下位 25% で Hi/Lo 群に分け, ECR-GO の 2 次元, 自己観 (見捨てられ不安), 他者観 (親密性) の得点を比較した (表 4-1, 表 4-2)。その結果, 「恋愛不安」Hi 群は Lo 群よりも有意に自己観得点, 他者観得点が高かった (表 4-1)。恋人中心 Hi 群 Lo 群間で, 自己観, 他者観の得点に有意な差は認められなかった (表 4-2)。

3. 4つの愛着スタイルと恋愛依存傾向の関連

恋愛依存尺度の 2 因子の得点について, ECR-GO により分類される 4つの愛着スタイル群間で差異が見られるかを検討した。まず, 対象者の愛着スタイルを分類するために, 愛着スタイルの 2 因子「見捨てられ不安」, 「親密性」の因子得点より, その正負の組み合わせから, 対象者を安定型, 拒絶型, とらわれ型, 恐れ型の 4つのタイプに分類した。恋愛依存尺度 2 因子において愛着スタイル群間で違いがあるかを検討するために 1 元配置の分散分析を行った。「恋愛不安」(F(3,102) = 26.026, p<.01), 「恋人中心」(F(3,104) = 20.19, p<.01) 両因子において主効果が有意であったため, Tukey の HSD 検定による多重比較を行った (表 5)。

その結果, 恋愛依存尺度の第 1 因子「恋愛不安」では, とらわれ型/恐れ型が安定型の得点よりも高く, 安定型は拒絶型よりも得点が高かった。恋愛依存尺度第 2 因子の「恋人中心」では, とらわれ型/恐れ型が安定型/拒絶型の得点よりも高かった (安定型と拒絶型では有意傾向が見られ, 安定型のほうが拒絶型よりも得点の高い傾向が見られた)。

表 5 愛着スタイルにおける恋愛依存尺度の差異

		安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型	F 値	HSD
		N=26	N=28	N=31	N=21		
恋愛不安	M	29.31	21.68	40.00	39.24	F(3,102) = 26.026**	とらわれ型 = 恐れ型 > 安定型 > 拒絶型
	(SD)	9.49	21.68	8.05	8.32		
恋人中心	M	25.77	20.31	34.87	33.55	F(3,104) = 20.19**	とらわれ型 = 恐れ型 > 安定型 = 拒絶型
	(SD)	8.60	9.03	6.99	7.53		

考 察

本調査では分析 2 より、ECR-GO の愛着の 2 次元では、「見捨てられ不安」、「親密性」と恋愛依存傾向の 2 因子に正の関連が見られた。恋愛依存傾向 2 因子 Hi/Lo 群間の愛着 2 次元の比較より、「見捨てられ不安」の高さが、恋愛依存傾向「恋愛不安」、「恋人中心」の高さと関連した。他方の次元「親密性」は、恋愛依存傾向との間に関連は見られなかった。つまり、自分は他者から愛情や注意を受けるに値する／しないという自己観が、恋人への依存に関連すると考えられた。

分析 3 より、4 つの愛着スタイル間の比較では、「とらわれ型」と「恐れ型」が他の型より恋愛依存傾向尺度 2 因子の得点が高く、恋人に依存する傾向があると考えられた。なお、恋愛依存尺の「恋愛不安」においては、「安定型」が「拒絶型」よりも得点が高かった。「恋人中心」では、両型に有意傾向が認められ、「安定型」が「拒絶型」よりも得点の高い傾向があった。すなわち、「安定型」と「拒絶型」の恋愛依存傾向尺の得点を比較すると、「安定型」は「拒絶型」よりも得点が高いか高い傾向を示した。これより、自己観、他者観がともにポジティブで、他者から愛情を受けるに値し、他者は助けてくれるし関心を持ってくれるという感覚を有する「安定型」は、恋人にある程度は依存することがわかる。一方、ポジティブな自己感を持ち、他者は信頼できないか拒否的であるというネガティブな他者観を持つ「拒絶型」は、4 タイプ中もっとも恋人への依存度が低い。この結果は、恋人への依存度が最も高いのは「とらわれ型」、もっとも低いのは「拒絶型」とした片岡・園田 (2008) の調査結果とほぼ一致する。本調査では、「恐れ型」の恋愛依存尺得点が他の型と比べ高いという違いが見られた。「とらわれ型」、「恐れ型」両型には、自己観がネガティブであるという共通点がみられ、自分は他者から愛情や注意を受けるに値しないという否定的な自己観を持っている。両型は恋愛関係において、恋人から自分への注意や関心が失われるのではないかと不安や恐れから、相手の要求に応えようと、無理に相手の予定に合わせるなど恋人中心の生活となり、恋愛関係での過度な依存につながりやすいのではないかと考えられた。

本調査では、特定の対象ではなく、一般他者を想定した場合の愛着スタイルの個人差が、恋愛依存傾向と関連した。他者との関係において見捨てられ不安が高い「とらわれ型」、見捨てられ不安が高く親密性を回避する「恐れ型」では、恋愛という親密な二者関係において、依存が生じやすくなる可能性があるのではないだろうか。恋愛依存傾向と愛着スタイルの関連が見られたことから、恋愛関係で起こる様々な出来事に対処する際、また恋愛関係の崩壊時に、否定的な自己感を持つ愛着スタイルは、何らかの脆弱性を持つと推測される。田沢 (2016) では、愛着スタイルの違いにより、恋愛関係崩壊後に受ける衝撃や失恋コーピングが異なった。すなわち、「とらわれ型」では、失恋コーピング「未練」の使用頻度が高く、失恋相手に強くコミットし、一体感や重要性を感じていたため、関係崩壊時に受ける心理的なショックが大きかった。親密な対象から見捨てられるかもしれないという不安の高さは、恋愛関係を終えられず、恋人に強い執着を示すこと、関係崩壊時には安全基地を失ったような衝撃を受けると推測された。

伊福・徳田 (2008, 2006) は、恋愛依存尺度の開発の際、恋愛関係において相手との適切な距離を保てず過度に恋人に依存する嗜癖的な傾向を捉えることを重視している。本研究で用いた恋愛依存尺度は、依存の病理的側面を捉えるものではないが、「恋愛不安」、「恋人中心」という 2 因子は、恋人の自分への注意や関心が失われるのではないかと不安や恐れと、無理に相手の予定に合わせ、要求に応えようとする行動傾向であり、このような傾向が自他に苦しみを与え、自己管理がおろそかになる、といった生活面や精神面に大きな影響を与えることは十分に考えられる。学生相談など心理面接の場で、恋愛関係に悩み相談に訪れる青年に対して、このような結果を踏まえ臨床的介入を検討することは意義があるであろう。

本調査の問題として、調査対象に女性が多く偏りのあるデータであったことがあげられる。伊福・徳田 (2006) では、恋愛依存尺度の得点に性差が認められており、男性のほうが女性よりも依存性尺度得点が高いと報告している。本調査では、恋愛依存尺度、ECR-GO において性差は認められておらず、また人数の限界により、性別を含めた複数の要因の関係は検証されていない。今後さらにデータを増やし上述の検証を行う必要がある。

引用文献

- Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. 1991. Attachment Style among young adults ; a test of a four category models. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. 1973/2000. *Attachment and loss : Vol. 2. Separation : Anxiety and anger* New York : Basic Books (黒田実郎ほか 訳 1976 母子関係の理論 2 : 分離不安 岩崎学術出版社)
- Hazan, C. & Shaver, P. R. 1987 Romantic Love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 伊福麻希・徳田智代 2006 恋愛依存傾向尺度作成の試み－男女観における恋愛依存傾向の比較－ 久留米大学心理学研究, 5, 157-162.
- 伊福麻希・徳田智代 2008 青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検討 久留米大学心理学研究, 7, 61-68.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 19(1), 59-76.
- 金政祐司 2005 青年期の愛着スタイルと感情の調節と感受性ならびに対人ストレスコーピングとの関連－幼児期と青年期の愛着スタイル間の概念的ー貫性についての検討 パーソナリティ研究, 14(1), 1-16.
- 片岡祥・園田直子 2008 青年期におけるアタッチメントスタイルの違いと恋人に対する依存との関連について 久留米大学心理学研究, 7, 11-18.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 a 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, 75(2), 154-159.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 b “一般他者”を想定したアタッチメントスタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 尾形和男・船橋真緒 2016 夫婦関係が幼児期の父子関係イメージ・母子関係イメージ, 高校生の愛着スタイル, 対人関係に及ぼす影響 愛知教育大学研究報告. 教育科学編 65, 75-84.
- 大野久 1993 アイデンティティのための恋愛に関する質的データからの接近 日本教育心理学会総会発表論文集, 35, 208.
- 坂上裕子・菅沼真樹 2001 愛着と情動制御 教育心理学研究, 49, 156-166.
- Steven, W. R. & Jeffrey, A. S. (Eds.) 2004 *Adult attachment : Theory, Research, and Clinical Implications* : The Guilford Press (遠藤俊彦・谷口弘・金政裕司・串崎真志 監訳 2008 北大路書房)
- 田沢晶子 2011 大学生の恋愛依存傾向と失恋経験の関連－恋愛依存尺度, 失恋コーピング尺度を用いて－ 日本心理学会第74回大会 日本大学文理学部 発表論文集, 171.
- 田沢晶子 2017 青年期の愛着スタイルに関する予備的研究－失恋経験に注目して－ 大阪大谷大学紀要, 51, 67-76.